

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹 選

- 心太淋し告別式のあと (埼玉県美里町) 飯野佳代子
読みかけの作家の訃報の峰 (佐久市) 上野 良江
昔昔も水着の日本海 (辰野町) 矢島あさ子
短夜の牛の眼に煙の火 (埼玉県美里町) 川崎 彰典
吾が影の息絶え絶えの大層かな (須坂市) 丸山 英子
黒蝶の地べたに止る広島忌 (小海町) 依田 久代
九夏三伏イランの子等にやすらぎを (飯綱町) 小林 紀子
仰向けに蝉ジジと鳴き空を掻く (須坂市) 東島賀代子
両耳を研ぎ澄ましてや西瓜割り (長野市) 福沢健太郎
黒雲や一転俄か青風 (飯田市) 大石 昭重
佳作
軒つばめ果立ち免許の返納日 (飯山市) 伊東 宣和
色褪せし舊字の本や敗戦日 (上田市) 田名網 剛

選 評

一句目、心太^{とろろ}は友人や恋人と楽しく食べるのが普通であるが、告別式の後に食べるそれは殊のほか淋しく感じるものである。逆説的な俳諧味。二句目、長編の小説を読みかけていた時にその作家の

訃報が。「雲の峰」という季題に司馬遼太郎を思い出した。三句目、「昔昔」という言い方が物語を始める感じで面白い。日本海という舞台設定も青春の冒険のような旅を彷彿とさせる。

今 井 聖 選

- 道をしへ権堂町へと向きを委ふ (松本市) 平林 大喬
人見知りせぬ乗鞍の岩雲雀 (佐久市) 西田 和彦
電気柵の囲む中なる稲の花 (長野市) 松本 宏要
土用風健気な君の焼くもんじや (松本市) 塩原 弥生
トラックで佐久穂から来し蛙かな (佐久市) 水間喜美子
早星不審メールの通知音 (大桑村) 木戸口信幸
子等ありし秋夕焼の村の辻 (箕輪町) 向山 政俊
顔かめ妻の意固地や桃の種 (長野市) 大島 昇
だぶだぶのサンダルで星探しをり (長野市) 鎌田 隆靖
八月や螺旋に辿る歩道橋 (飯山市) 田中 琢雄
佳作
ゆらゆらと庭歩きをりあめんぼう (須坂市) 東島賀代子
油照乳の香纏ひて添ひ寝かな (長野市) 赤沼 英行

選 評

一句目、斑猫^{いぬねこ}(道をしへ)が長野市の中心街である権堂町に誘う。作者がこの町に行きたいという気持ちが出ている。二句目、風光明媚な「名所」を飛ぶ野鳥が人見知りをしない。鳥の元来の性向か。

人への馴れか。三句目、野生動物からの防御として田に電気柵を巡らせた。無粋なようだが生活を守るため。四句目、食事をする相手(異性)が「もんじゃ」を焼いてくれる。その仕様が健気に思える。

神 野 紗 希 選

- 学祭終ふホットケーキのやうな月 (小諸市) 加藤 陽介
掌に拍手の余熱星月夜 (松本市) 久我 綺乃
清流の闇をほといて初螢 (長野市) 金沢 重雄
おおらかに生きんと思ふ黄のカンナ (上田市) 竹内 創造
定型にしつくりはまらない八月 (中野市) 風間 陽介
落蟬の翅に光の記憶かな (安曇野市) 堀部 明晃
風鈴をしまつて瀬音風の音 (佐久市) 佐藤 勝子
通けきを人影歩む夏野かな (飯綱町) 坂井 寿男
風となり光となりて虫時雨 (中野市) 芋川 菊水
あかとき煙の湿りや茄子の花 (佐久市) 箕輪なつ江
佳作
原爆忌被爆樹木を護る樹医 (箕輪町) 松沢 陸
帰省のトリコロールの靴でかし (松本市) 小川 夏央

選 評

一句目、ホットケーキのように月がふっくら明るく見えるのは、学園祭が充実していたから。やわらかな心で帰路につく。二句目、コンサートかお芝居か、力強く拍手した後の手が、じいんと熱を帯

びている。天に満ちる星々も余韻をやさしく彩る。三句目、闇を「ほどく」という詩的な表現が、螢火の軌跡を素朴に輝かせた。四句目、カンナの黄の力強いまぶしさ。自然に励まされ、今日を生きる。